

ISBN978-4-9908982-0-5 C0040 ¥1000E



頒布価格：1,000円

古写真から紐解く 六甲山地 東お多福山草原の移り変わり

橋本佳延 著 東お多福山草原保全・再生研究会 編

古写真から紐解く

六甲山地 東お多福山草原の 移り変わり

橋本佳延 著

東お多福山草原保全・再生研究会 編



目 次

年代に沿ってみる東お多福山の姿

■ 1960年代以前	p.5
■ 1960年代	p.9
■ 1970年代	p.17
■ 1980年代	p.37
■ 1990年代	p.87
■ 2000年以降	p.103

撮影地点の今昔

～様々な年代に同一地点で撮影された写真を比較して	p.117
--------------------------------	-------

1960 年以前

1960年以前は、わが国ではカメラは高級品であり、一般家庭での普及率が低かった。そのため、今回の調査で収集できた写真点数は少なく、年代も1930-40年代以前にさかのぼることは出来ていない。しかし、少ないながらも写真には東お多福山草原の様子が生き活きととらえられており、当時の東お多福山にススキとネザサが混生する草丈の低い草原が広がっていたことが分かる。

学術的には、本地域のススキ草原は背丈の高いススキと背丈の低いネザサが共存するススキ-ネザサ群集に分類されており、その様子が今回の写真からも確認することが出来た。草原内で飲み物を売る行商の姿が収められている点も興味深い。

この年代には1952年より芦屋カンツリー倶楽部のゴルフ場開発がはじまったほか、1956年には六甲山が瀬戸内海国立公園(六甲地域)に指定されるなど六甲山が観光地として社会的に位置づけられていく時代であった。これと併せて1957年には東お多福山草原が国立公園特別地域に指定されるなど、自然・景観の保護の視点からも社会制度を整えられていく時代でもあった。



撮影年月日：1965年 提供者：鈴木和夫氏 写真番号：027

東お多福山の中央尾根筋には成人男性の腰高程度のススキとネザサが混生する草原が広がっていた。人の背丈を越える樹木は見られず、低木が点在するのみであったようだ。ススキの若い穂が写っていることから晩夏から初秋の写真と思われる。



撮影年月日：1966年 提供者：鈴木和夫氏 写真番号：030

写真中央の人の集まっている場所が東お多福山山頂で、その奥には奥池の姿が写っている。写真中央から右下に向かって斜めに横切る踏み跡道は神戸市と芦屋市の市境付近に位置している。現在は樹林に阻まれ、このアングルから奥池を見ることは出来ず、踏み跡道も通行できない。



この頃は、東お多福山に一面に草原が広がり、パノラマを楽しむハイカーで多数賑わっていたようである。ススキの穂もみられるが、写真下段に写る草原の様子から、ネザサの割合（被度）が高かったことがうかがえる。この場所は草丈が成人の膝丈～腰高の植分だったようだ。

撮影年月日：1965年
提 供 者：鈴木和夫氏
写 真 番 号：028



撮影年月日：1966年 提供者：鈴木和夫氏 写真番号：031

草原内には、少年の腰高程度の草丈の低い場所もあった。写真の様子から優占種はネザサで、その中にネザサより背丈の高いススキの株が点在していたことがうかがえる。

かつては、東お多福山は西お多福山や七兵衛山と併せて本庄山（現在の兵庫県神戸市東灘区本山町森に類似する範囲）とよばれており、摂津国菟原郡本庄九ヶ村が江戸時代以前から総有していた入会山であって、肥料や薪、薬草の採取など村民の生活と切り離せない財産でした（本庄村史 歴史編）。

神戸深江生活文化史料館の収蔵資料には、昭和23年には本庄山での採草にあたっては地区ごとに一定量の入山証が割り当てられ、採草（資料では笹刈と表記）希望者による入札が行われていたことが記録されています。詳しくみると、深江地区では30枚の入山証に対して157名の申し込みがあり、3月15日に「くじ引き」によって入山者を決定すること、くじ引きによって30名の当選者と10名の補欠者が選ばれ、当選者は金 参拾円と引き替えに入山証を受け取る決まりとなっていたことが記録されています。つまり、草原での採草の権利を巡る競争率は約5倍で、草はお金を払って得て利用する大切な資源であったことが分かります。深江地区では明治期になると集落の家のほとんどが茅葺きから瓦葺きの屋根に変わったことが本上村史 地理編・民俗編に記されており、昭和初期の採草目的は屋根葺き材としてではなく、農業や畜産のためだったかもしれません。

いつの頃からか、東お多福山で刈り取った草を資源として利用することがなくなり、刈り取りそのものもなくなって、面積の縮小や草原の優占種の交替（ススキからネザサ）が進行しました。2007年から、東お多福山の一部分でススキ草原の再生を目指して年1回の刈り取り管理が再開されています。現在は刈り取った草の大半は現地に積み置かれていますが、量が増えつつあるススキを収穫し、阪神間の文化財となっている茅葺き民家の屋根の葺き替えに使う試みがはじまっています。今後、ススキ草原の再生が進むことで、草の利用も拡大していくことを願うばかりです。



写真1 東お多福山草原で刈り取られたススキを屋根用に選別して束ねる様子



写真2 ススキの束を手分けして山から下ろす。

1970年代

1970年代にはカメラの世帯普及率が70%に達していたことから、この年代以降は写真収集点数が豊富となり、東お多福山を様々な方向からとらえた写真を見ることが出来るようになっている。カラー写真が多くなり、色情報から判断できる事柄も増加している。

1971年には芦屋市域に位置する草原部分が国立公園特別保護地区に指定され、神戸市域と芦屋市域をまたがる東お多福山草原は、管理形態が異なる2つのエリアに分けられることとなった。その結果、1970年代中頃になると、木竹の伐採が原則禁止である特別保護地区では刈り取り管理が実施されなくなったようである。そのため、この頃の写真には、冬枯れしたススキの穂が残る草原が広がる芦屋市域と、刈り取りが実施され草丈の低い草原が広がる神戸市域がはっきりと区別できる景観を収めたものが多い。

また1969年のネザサの一斉開花枯死現象の影響もあって、この年代の写真には草原内に生えるネザサの姿をとらえたものはほとんどない。代わりに、ネザサが衰退したことによってススキが旺盛に繁茂し、高密度のススキの穂がなびく草原の姿をとらえた写真が多く残されている。ススキの草丈は場所によっては3mに達していたことも写真から明らかになった。

1978年からは神戸市による背山緑化事業（東お多福山補植）が始まり、神戸市域においてヒノキの植栽する場所を中心として大々的な草原刈り取りが行われた様子が写真に収められている。



キキョウ
(環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU))



キンラン
(環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU))



スズサイコ
(環境省 準絶滅危惧種 (NT))



オケラ
(兵庫県 Cランク)

東お多福山では、その多くの場所で草原の優占種がススキからネザサに変化し、草原内部が暗い環境となったために植物の種多様性が低下してしまいました。しかし、わずかに残った草丈の低い植分や登山道脇、踏みつけの多い場所などの明るい環境では四季折々に様々な草原生植物の姿を見ることが出来ます。

春は、スマレ、ニオイタチツボスマレ、シハイスミレ、ナガバナタチツボスマレ、エイザンスミレといったスマレ類やニガナ、ミツバツチグリ、ヒメハギなどの草丈の低い種が見られます。2番目の写真にあるキンランは環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。東お多福山はあまり見かけませんでしたが、刈り取りの再開でわずかに生育が確認できるようになりました。

夏はササユリ、オカトラノオ、ノアザミ、オトギリソウ、オミナエシ、カワラナデシコなど草丈の高い種の花を見ることが出来ます。数が少なかったササユリは管理再開によって増加傾向にあります。夏に花を咲かせる植物のうち、環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類のキキョウ（1番目の写真）は、東お多福山では3カ所しか確認されておらず、風前の灯火です。また準絶滅危惧種に指定されるスズサイコ（3番目の写真）も数十個体と少なくなっています。

秋に花を咲かせる植物には、ワレモコウ、ツリガネニンジン、シラヤマギク、アキノキリンソウ、リュウノウギク、リンドウ、センブリなどがあります。東お多福山でも数が減少傾向にあったオケラは、兵庫県レッドリストでCランクに指定される絶滅危惧種ですが、草原管理の再開によって、生育状態は改善に向かっています。

上に名前を挙げた種以外にも様々な草原生植物を草原内でみることが出来ますが、絶滅危惧種に限らずその多くがかつてと比較して個体数を減らしていると考えられます。これらの植物を未来のこどもたちに知ってもらうためにも、東お多福山でこれらの植物に出会ったときは現地で愛でるに留め、採集などは行わないようお願いします。

※希少性の評価は2016年2月現在の情報です。

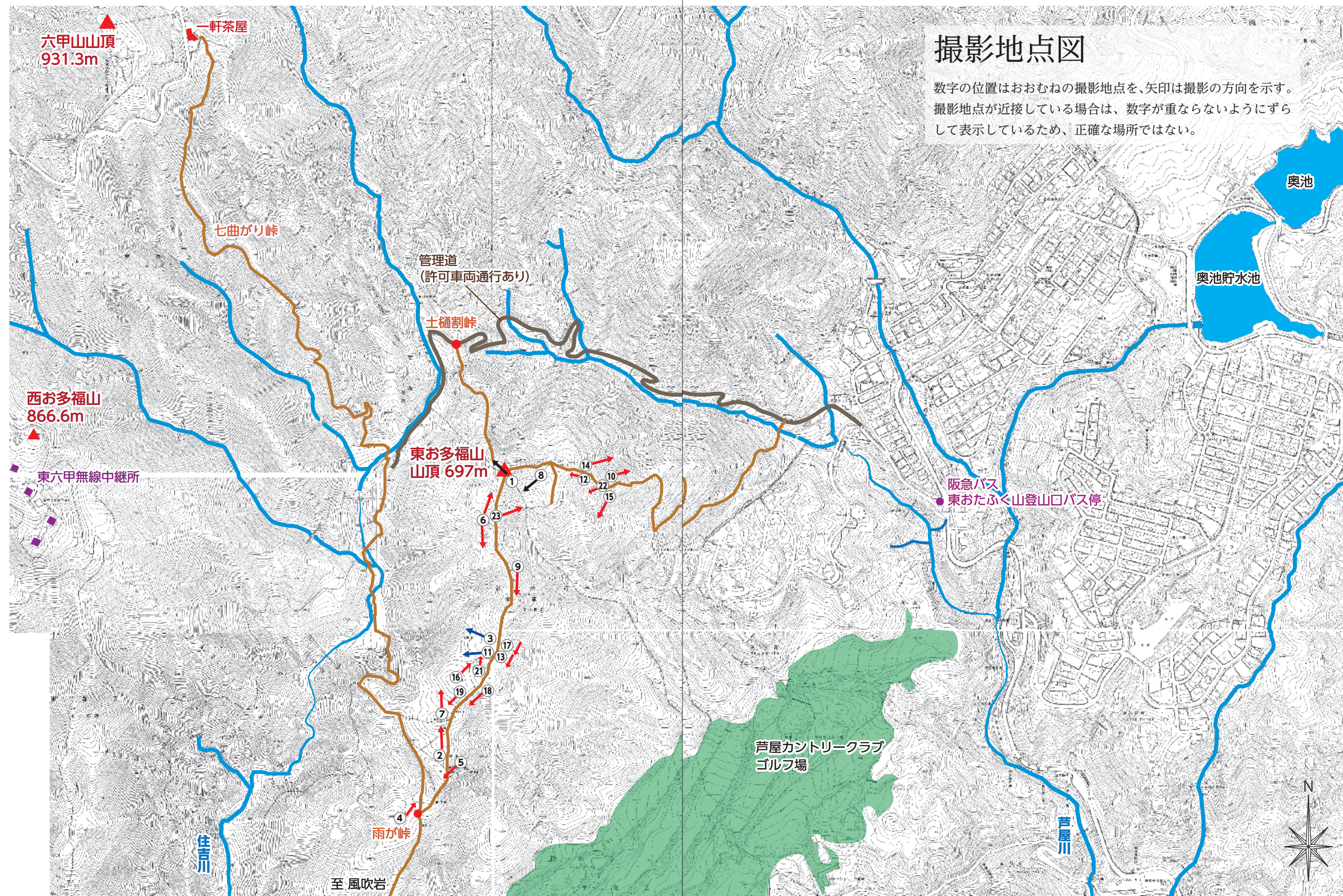
撮影地点の今昔

～様々な年代に同一地点で撮影された写真を比較して

この章では、古写真の撮影地点を特定し、同一地点から撮影された複数年代の古写真と現在の様子を比較することで、東お多福山草原の植生と眺望の変遷を明らかにする試みを行った。

ここでは23地点で撮影された写真をそれぞれ比較している。標識のある山頂や雨が峠などは記念撮影ポイントとなっており、複数の年代の古写真を得ることが出来たため、植生や眺望の経年変化をより詳しく理解することができる資料となっている。

また武田義明氏の提供写真は定点観測を意図して撮影されたものが多く（地点21,22,23）、1990年以降の植生の変遷を知る上で大変貴重な資料となっている。



⑨ 山頂平場付近から南西方面の尾根を眺める

1980年代、この地点からの眺望は広く開けており麓の芦屋カンツリー倶楽部のゴルフコースまで見通せ、草原全体の広がり把握することが出来た。写真197は1978年から神戸市の実施した背山緑化事業（東お多福山補植）で植栽するヒノキの苗を背負う作業員の姿を捉えている。

現在は、この周辺は侵入したコナラやアカマツの成長によってできた夏緑樹林に眺望が阻まれ、草原らしい植分は登山道両脇のわずかな場所でしか確認できない。



撮影年月日：1981年 6 - 9 月 提供者：神戸市森林整備事務所 写真番号：197



現在の様子

撮影年月日：2014年10月 8 日 撮影者：橋本佳延

⑩ 芦屋市域登山道から奥池貯水池を眺める

1980年代には芦屋市域の登山道から高密度のススキの穂が広がる草原の向こうに奥池貯水池全体をみることができた。しかし、現在ではススキの姿はほとんどなく、草原周辺の森林化（コナラ林化）により眺望も阻害され、奥池貯水池はわずかに顔を見せるのみとなっている。



撮影年月日：1984年10月14日 提供者：山下広行氏 写真番号：441



現在の様子

撮影年月日：2014年10月 8 日 撮影者：橋本佳延

著 者	橋本佳延（橋本佳延） 1976年愛知県に生まれ。2001年に神戸大大学院総合人間科学研究科修了、建設コンサルタント会社を経て、現在は兵庫県立人と自然の博物館主任研究員。学術博士。専門は植生学・生物多様性保全学。
編 者	東お多福山草原保全・再生研究会 2007年11月より自然保護団体5団体が集まり、行政や研究機関と協力しながら東お多福山草原の保全活動（ネザサ刈り）を開始。保全活動だけでなく、草原の魅力を発信する普及活動もおこなっている。2016年現在は9団体により構成され、年6回の保全活動を実施している。



行き方

阪神芦屋駅、JR芦屋駅、阪急芦屋川駅から阪急バス（80系統、または81系統）に乗り、東お多福山登山口バス停で降ります。登山道を45分歩けば、そこは六甲山地最大の草原がひろがる東お多福山山頂です！

古写真から紐解く六甲山地東お多福山草原の移り変わり

発行日：平成28年2月29日
著 者：橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）
編 者：東お多福山草原保全・再生研究会
発行 者：東お多福山草原保全・再生研究会
〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館気付 橋本佳延
印刷所：株式会社光陽社

本書の内容は、平成25年度科学研究費補助金若手研究B（課題番号：23701026）で得られた研究成果を元に構成されている。
本書は公益社団法人 兵庫県緑化推進協会の助成（平成27年度森林ボランティア活動支援公募事業）を得て刊行された。